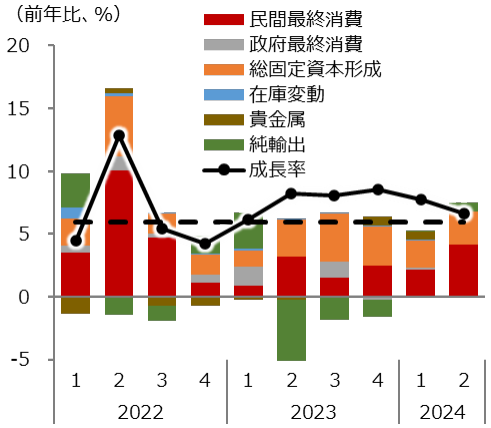
インド

GDP（2024年4-６月期）

総選挙以降、生産・消費に陰り、先行き成長率は6%台後半へ鈍化

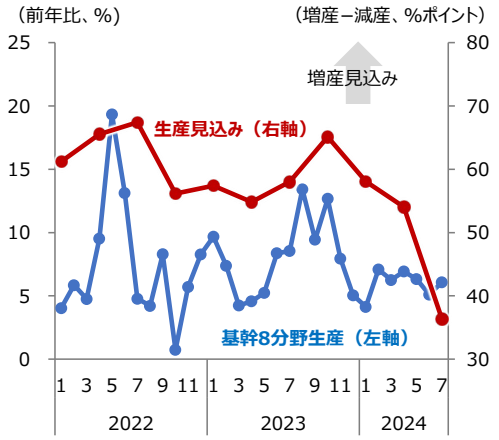
政策・経済センター
金成大介
03-6858-2717

1 実質GDP成長率



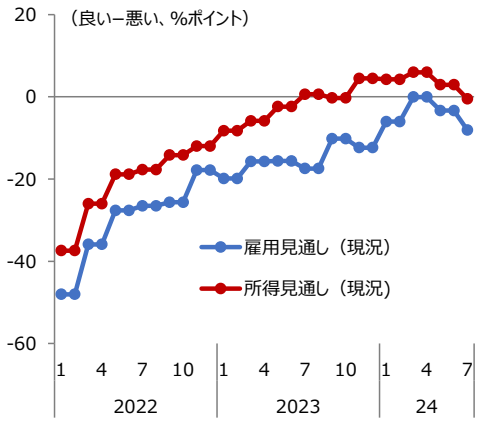
注：棒グラフ合計と線グラフの差は、統計誤差。破線は17-19年の平均。
出所：Macrobondより三菱総合研究所作成

2 生産見通しと基幹８分野生産



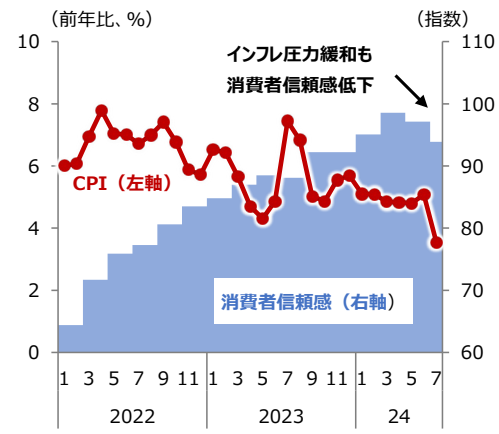
注：基幹8分野は石炭、原油、天然ガス、精製品、電力、鉄鋼、セメント、肥料で工業生産の約4割を占める。生産見通しは、インド中銀が約千社を対象に四半期ごとに実施している調査。
出所：Macrobondより三菱総合研究所作成

3 雇用・所得見通し（現況）



注：直近は、24年7月。
出所：Macrobondより三菱総合研究所作成

4 消費者信頼感とCPI



注：直近は、24年7月。
出所：Macrobondより三菱総合研究所作成

評価ポイント

今回の結果

- 24年4-６月期のインド実質GDP成長率は前年比+6.7%と、24年1-3月期の同+7.6%から鈍化した。成長鈍化は統計誤差が主な要因。24年4-6月期時点では、固定資本投資、民間消費ともに堅調を維持している（図表1）。
- GDP発表前（8/6-8）開催の金融政策決定会合声明で、インド中銀は24年度（24年4月～24年3月）、25年度（25年4月～26年3月）ともに実質GDP成長率を+7.2%（23年度実績同+8.2%）と予想している。

今後の注目点

- 足もと、インドの高成長をけん引してきた生産拡大に、頭打ち感がでてきた。基幹8分野の生産が前年比で伸び悩んだほか、7月公表のインド中銀調査の生産見通し（増産－減産）は20%ポイントほど悪化している（図表2）。
- 雇用・所得環境の悪化から、家計の景況感も低下に転じている。7月に入り家計の雇用、所得の現況認識（良い－悪い）は悪化度合いを強め、昨年11月からプラス圏にあった所得の現況認識はマイナスに転じている（図表3）。インフレ圧力の緩和にもかかわらず、消費者信頼感は低下傾向にある（図表4）。
- 6月にモディ３期目政権が成立して、7月には24年度国家予算が発表された。2月公表の暫定予算案比、歳出・歳入額に大きな変化はなかったが、歳出内訳は、連立政党への配慮から地域・農村振興等へ厚めの配分となった。今後、政治基盤の安定化を優先し、過去２期モディ政権が志向してきた大企業寄り政策の軌道修正を行うことで、成長の勢いが鈍化する可能性もある。
- 生産、家計の景況感に頭打ち感があること、6月総選挙での与党過半数割れにより、経済政策の軌道修正の可能性があることを踏まえると、先行き、インド経済が23年初から続けてきた8%近辺の高成長へ回帰することは見込めない。
- もっとも、インドの成長路線は変わらない。民間消費の拡大、インドの地政学上の重要性に着目した投資が成長の原動力となるであろう。24年度の実質GDP成長率は、前年比+6%台後半の成長は確保できるであろう。

Copyright (C) Mitsubishi Research Institute, Inc.